



動物レスキュー通信

2019年10月 第77号 (令和元年10月1日発行)

発行元
一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月(しづく)：詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
ペット災害危機管理士 三級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

必ず訪れる最期 を迎えるために大切な準備

命あるものは必ずその最期を迎えます。人間はもちろん、犬や猫を初めとした動物や植物・昆虫など、広い意味で言えばぬいぐるみやおもちゃ、電化製品などもいずれは壊れて使えなくなれば、それを命が尽きたと思えば、この世に存在する全てのものは、その最期を迎えると言えるかもしれません。以前は3世代、4世代が共に暮らす家庭は珍しくなく、曾祖父母、祖父母などの死に立ち会う機会も少なくありませんでしたが、現在は核家族が多くなり、人の死に立ち会う機会が減つてきています。そして平均寿命が伸びた事もあり、死について考える機会も必然的に減つているように思います。そんな中、人間よりもはるかに寿命が短いワンちゃん、ネコちゃんを家族として迎える時には、その最期についてもきちんと考えておく必要があります。

犬猫との関係 昔と今

犬猫の平均年齢は1980年には3~4歳、1989年には13~14歳そして1999年には14~15歳となり、その後ずっとキープしています。かつて、一般では犬猫の平均寿命は5~7歳と考えられていたので、1人が一生のうちに飼育できる犬猫の頭数は単純計算として(成人して犬猫を飼育できる期間を50年と想え、1匹ずつ飼育した場合)7~10頭となります。しかし平均寿命が14~15歳となつた現在は同じ50年でも3~4頭になります。そろ

なり、その分、関係性も濃いものとなります。親密な関係を築いている理由として、この事だけではなく、犬猫の飼養方法の変化も大きなものがあります。私が子供の頃は、犬は外に大小屋があり、繋がれて飼われているのが当たり前でした。ネコは家で飼われていたとしても、外出が自由で、何日か帰って来ない日がある、よその家でも可愛がられていて、おやつを貰つて帰宅する、なんて光景もよく目にしました。しかし現在では犬猫の室内飼養が浸透し、物理的だけではなく心理的にも距離感が近いものとなり、共に過ごす時間も長くなる事により、家族同様の存在から、家族の一員としての存在に変わりつつあります。そうなると、愛犬、愛猫の親である飼い主さんは、少しでも長い時間、元気で楽しく長生きさせてあげられるように、食事の内容を考えたり、適度な運動、温度管理、ワクチン接種、病気対策、健康診断、通院など、しっかりしたケアを行つ必要があります。それと同時に、これらのケアを行えるのは飼い主さんだけであり、飼い主さん自身が必ずしめで、愛犬、愛猫の最期を見取つてあげないといけない、と言う事です。人間の孤独死が社会問題になっていますが、家族や親せきと良好な関係を築いている場合は、自分の最期を見取ってくれる人がいます。しかし愛犬愛猫には最期を見取つてくれる人は飼い主さんしかいません。ですから必ず愛犬、愛猫の最期を飼い主さん自身が看取らなくてはなりません。ですから、その現実から目をそむけることなく、「元気なうちに、心構えをしておく事がとても大切です。



看取れる事は幸せ

最期を迎えるその時だけではなく、愛猫の寿命が延びた事により、高齢であるがゆえの病気が介護が必要になり、飼い主さんは金銭的な負担だけではなく精神的な不安も襲いかかるなど、新たな問題も生まれているのが現状です。実際に私も経験しましたが、余命宣告や不治の病だと獣医さんから告げられた時、治療をどこまで続けるのか、延命治療や措置をするのか、緩和ケアをするのか、それとも安樂死を検討するのか、このような苦しい選択を迫られる場面に遭遇する飼い主さんは少なくありません。まして、愛犬、愛猫は自らその意思決定をする事はできません。愛犬、愛猫にどのような最期を迎えるかは、全て飼い主さんが決定することができます。目の前で愛犬、愛猫の死期が迫っている状況に動搖し、冷静な判断が出来なくなる可能性もあります。大切な事は自分の想いを優先させるのではなく、愛犬、愛猫の立場に立つて考える事。もちろん何が正解なのかは、誰にも分かりません。たつて愛犬、愛猫にしかその想いは分からないのでですから。しかし、最期の時を迎えるまでできるだけは大らしく、愛犬、愛猫の生きていられるように、愛猫にはネコらしく生きていられるように、普段からの体調管理に気を配り、加齢による身体の変化を見落とさず、たくさんの愛情情を注いであげて下さい。そうすれば最期を迎えた時に飼い主さんが後悔しないで済みます。愛犬、愛猫の最期を看取れる事は飼い主さんにとって幸せなことだと思います。愛犬、愛猫の最期を看取りました。そこで命の大切さや愛をたくさんもらいました。大切な命について一度考えてみる事が動物を愛する心にも繋がると信じております。(詩月)